

ネオフォビア（neophobia 新奇恐怖症あるいは忌新症）というのがある。新しいものに恐怖を感じる症状のことだが、極端な場合には、新しい環境や新しい人間関係に恐怖を感じて、極端な場合には生活が困難になる。環境や人間関係だけでなく、物に対してもネオフォビアはある。むしろこちらの方が本質的だ。ネオフォビアは程度の差はあっても誰にでもあるだろう。全く見たこともないものを何の抵抗もなく平気で受け入れられる人の方が異常だ。生物は体の外から物質やエネルギーを取り入れなければ生きていけないが、厄介なことに、それらはいつでも安全ではない。誤って有害な毒物を取り入れてしまうことがある。もし、過去に取り入れたことがあり安全だとわかっている物と全く知らない物があれば、過去に取り入れたことのあるものを選択するに決まっている。そのために、いろいろなレベルで「記憶」がある。この記憶は、人間が持っている言語化された記憶とは限らずに、物質レベル、細胞レベルでも様々な記憶がある。記憶にある有害なものは避けるが、記憶に全くないものも避ける。多くの生物が生き残ってきたのは、そのような仕組みがあるからだろう。本来これは悪いことではない。しかし、厄介なことではある。たとえば、外国人や見知らぬ人に対する警戒心や恐怖心の根底にもこれがあるだろう。新しい提案や、新しい文化が容易に受け入れられないのはそのためだ。おそらく、これは人間や生き物の本能として組み込まれたもので、だからこそ克服が困難なのだ。老人は若者よりも記憶量が多い。記憶に従って判断することの有効性を信じている。実際、その方が確実だ。若者は老人に比べると記憶量が少ないから、この本能だけに頼るわけにはいかないので、知らないことにも挑戦しようとすることが多い。環境はいつでも安定ではないから、常に見知ったものだけが身近に手に入るとは限らない。食料が減れば見知らぬものを食べてみることも必要になる。誰かがそれに挑戦し、危険がないとわかれば、それをまねる。そうして群れとして新しい知識が蓄積されていく。多くの場合、若者がそれを可能にする。これは悪いことではないが、老人の警戒心を頑迷な保守主義として非難するにはあたらぬ。むしろ多くの場合、ネオフォビアは不確実性の中で生き残っていくための重要な要素だ。保守主義は非難すべきことではない。

それでは発展性がないし、今までの知識や経験では克服できないほどに周りの環境が変化した場合には対応ができないだろうという批判はあり得る。では、どうすればよいか。死んだ親父が秩父の山の中で暮らしていた時、山でキノコを採って、キノコ汁を作ってごちそうしてくれた。うまかった。キノコの知識をどこで学んだのかと訊いたら、そんなものはないといていた。どうしているのかというと、何年か前から新しいキノコを採って、少し齧ってみること始めたと言っていた。数時間たつて問題がなければ、少量食べてみる。少しずつ量を増やして、全く問題がないことを確認した。そうして、安全なキノコを選んだから、このキノコ汁は安全だということだった。そうなのだろうが、何年も前から、暇に飽かせてそんなことをやっていたのだ。全く暇な男だ。

それはそれとして、この方法はいつでも有効ではない。ふぐ毒など外来性の毒が蓄積して毒化する場合には、一度食べて安全だから次も安全というわけにはいかない。頼りないともいえるが、一度食べておかしいと思ったものは、言い訳をせずに次は食べない方がよい。

そういう意味で保守的だが、前もってちょっとずつ試しておくというのは、ネオフォビアという必要な本能を飼いなすためには悪くない方法だ、普段から少しずつ接触して、一歩ずつ安全を確かめる。そうして安心を作る。確かに賢い。ある年、急にきのこが食べたくなくても間に合わない。

豊洲移転問題以来、安全と安心の問題が出てきて、安全は確率的に納得可能だが、安心を納得するのは難しいという話だ。頑迷というか、意固地というか、厄介だ。普段から、接触しておくことが必要なのだ。自然科学系の人間は薬物や放射性物質を過度に怖がらない。接触機会が多いためだと思う。どの程度まで安心か感覚的に知っている。

イデオロギーや政治について、何が正しいか、真っ青になってその正当性を主張する頭がよさそうな人がいる。多分あれは馬鹿だ。そんなことよりも、小さなスケールでその考えを実践してみればよい。かつて、連合赤軍事件というのがあった。結局、仲間同士の殺し合いになってしまったのだが、世界革命なんてことを考えずに、せいぜい、学級会か町内会レベルで、自分たちの思想の有効性をためしてみればよかったのだ。すぐに、自分たちの考えのどこがうまくいかないのかがわかっただろう。

庶民が持っている、ちょっとずつやってみるという智慧は、必要な本能としてのネオフォビアを考えると、賢い人の論理的な説明よりもはるかに賢い。

うまくいかなかった時に、それを教訓とせずに言い訳をする人がいる。曰く、条件が悪かった。別の条件ならばうまくいく。うまくいかなかったからといってあきらめる必要はないが、ふぐ毒に当たったら、これは事実だから、条件によってはふぐが毒化することを否定できない。もう一度挑戦するには、ふぐが毒化する条件を明らかにしたうえで、その条件を完全に排除する方法を提示しなければならない。たとえば、配合飼料を使って育てた養殖フグだ。

別にいわゆる進歩的文化人を批判しているつもりはない。論理とはそういうものだし、成功したチャレンジャーとは謙虚にそれができた人だという話だ。